

# 鶏肉

## ◆飼養動向

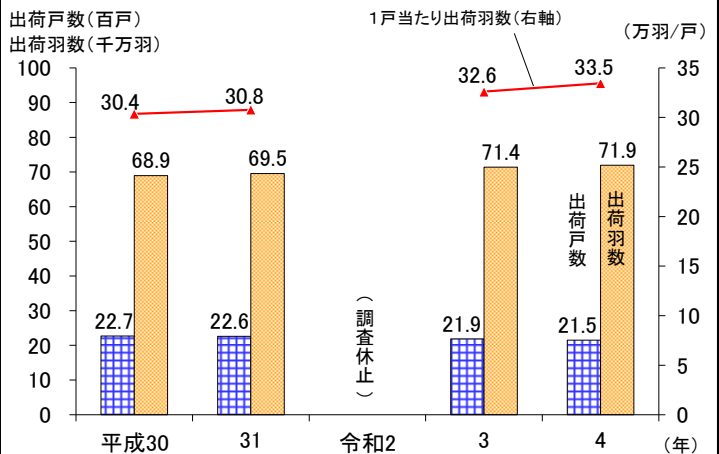
4年2月現在の出荷羽数は前年比0.8%増

ブロイラーの飼養動向は、小規模農家の廃業や大規模層（年間出荷羽数50万羽以上）のシェアの拡大を背景に、出荷戸数は減少傾向で推移する一方で、1戸当たりの平均飼養羽数や平均出荷羽数は年々増加傾向にある。

令和4年のブロイラーの出荷戸数は2150戸（前年比1.8%減）と前年をわずかに下回った（図1）。また、出荷羽数は7億1925万9000羽（同0.8%増）と前年をわずかに上回った。この結果、1戸当たりの出荷羽数は33万4500羽（同2.6%増）と前年をわずかに上回った（図1）。

なお、ブロイラーの出荷戸数および出荷羽数を規模別に見ると、ブロイラーの出荷羽数が50万羽以上の層が出荷羽数全体の49%を、出荷戸数全体の15%をそれぞれ占めた。

図1 ブロイラー出荷戸数および出荷羽数の推移



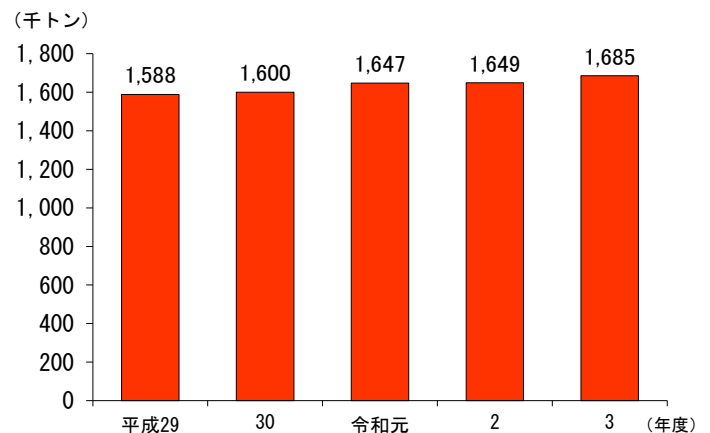
資料：農林水産省「畜産統計」  
注1：各年2月1日現在。  
注2：令和2年は農林業センサス実施年のため、調査休止。

## ◆生産

3年度の鶏肉生産量、前年度比2.2%増

鶏肉の生産量は、消費者の根強い国産志向や健康志向などを背景に、平成23年度以降、前年度を上回って推移しており、30年度以降は160万トンを超えて増加を続けている。令和3年度も、安定した需要が継続していることから、168万5351トン（前年度比2.2%増）と前年度をわずかに上回り、過去最高を更新した（図2）。

図2 鶏肉の生産量の推移



資料：農林水産省「食鳥流通統計」、「食料需給表」より農畜産業振興機構推計  
注：骨付き肉ベース。

◆ 輸 入

3年度の輸入量、鶏肉は前年度比7.5%増、鶏肉調製品は同6.8%増

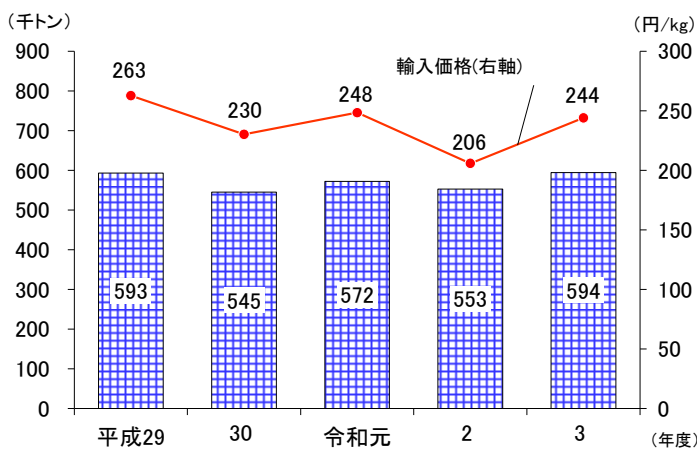
鶏肉

鶏肉の冷蔵品は消費期限が短いことから、輸入品のほとんどは主に加工・業務用に仕向けられる冷凍品である。

鶏肉の輸入量は、国内消費量の約25%を占めており、近年は50万トン台で推移している。令和2年度は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により業務用需要が減少する中、国内の輸入品在庫が高水準にあったことなどにより輸入量の減少が見られたが、3年度は、テイクアウトやデリバリー利用などによる中食需要の増加を受けて、59万4223トン（前年度比7.5%増）と前年度をかなりの程度上回り、過去最高を更新した（図3）。

輸入価格（CIF）は、1キログラム当たり244円（同18.6%高）と前年度を大幅に上回った。

図3 鶏肉の輸入量および輸入価格（CIF）の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：実量ベース。

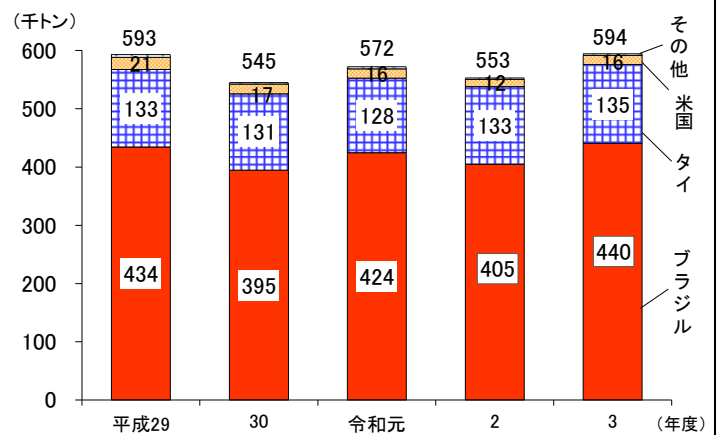
主要な輸入先のうち、ブラジルが全体の約7割を占め、タイ、米国が続いている。

国別の輸入量を見ると、ブラジル産については、全輸入量の7割以上を占めており、3年度は、44万435トン（同8.8%増）と前年度をかなりの程度上回った（図4）。

タイ産については、平成25年度の輸入再開以降、細かい規格への対応が可能であることなどから一定数量のニーズを得て推移している。3年度は、13万5335トン（同1.5%増）と前年度をわずかに上回り、2年度連続の増加となった。

米国産については、クリスマス需要などに向けられる骨付きもも肉が多くを占めており、3年度は、1万5908トン（同29.1%増）と、米国内で発生した高病原性鳥インフルエンザの影響を受けた前年度を大幅に上回り、4年度ぶりの増加となった。

図4 鶏肉の国別輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：実量ベース。

## 鶏肉調製品

鶏肉調製品（加熱処理や衣付け、調味した鶏肉など）の輸入量は、近年、外食・中食需要の高まりや消費者の簡便志向などを背景に増加傾向で推移している。

主な輸入先は、加熱処理施設が多数存在するタイおよび中国となっており、両国からの輸入量の合計で全体の99%を占める。高病原性鳥インフルエンザの発生に伴う加熱加工品を除く鶏肉の輸出規制を受けて調製品への切り替えが進んでいる。

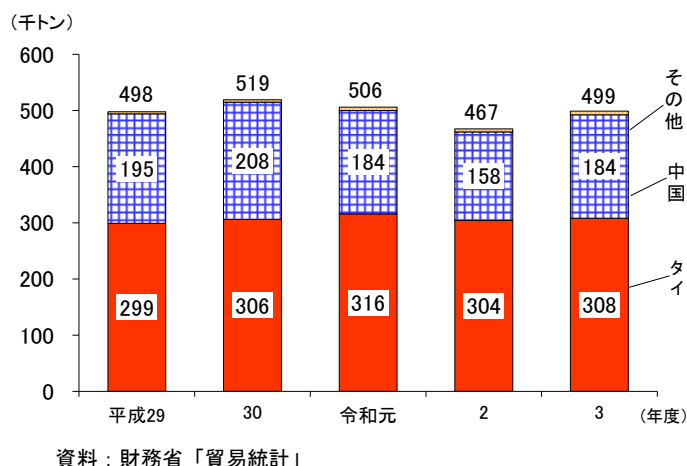
令和2年度にCOVID-19の影響により業務用需要が減少したことから、同年度はタイ産、中国産ともに前年を下回ったものの、3年度は中食需要の増加により、49万8941トン（前年度比6.8%増）と前年度をかなりの程度上回った。（図5）。

国別の輸入量は、タイについては、平成30年度以降、30万トンを超える輸入が続いており、令和3年度は、30万8286トン（同1.4%増）と前年度をわずか

に上回った。なお、全輸入量に占める割合は62%となった。

中国については、近年、人件費の上昇に伴う生産コストの上昇などにより鈍化傾向で推移している。3年度は、前年度に減少した反動により、18万4051トン（同16.7%増）と、3年度ぶりに前年度を上回った。なお、全輸入量に占める割合は37%となった。

図5 鶏肉調製品の国別輸入量の推移



## ◆消費

3年度の推定出回り量は前年度比3.5%増、家計消費量は同2.3%減

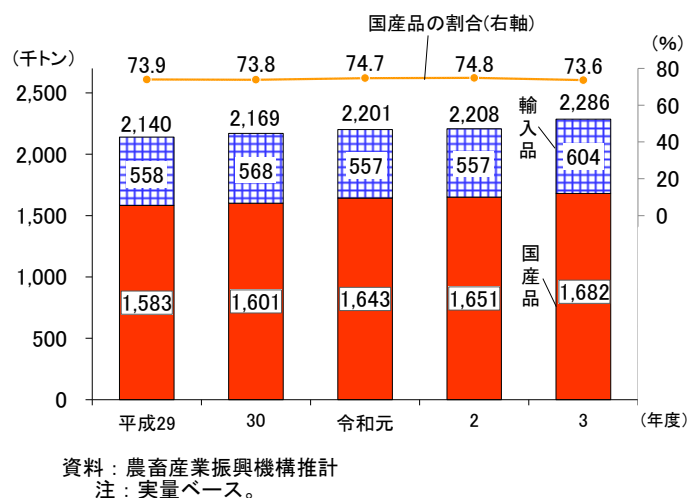
鶏肉の推定出回り量は、近年、消費者の低価格志向や健康志向などを背景に増加傾向で推移しており、令和3年度は228万5723トン（前年度比3.5%増）と17年連続で前年度を上回り、過去最高となった（図6）。

出回り量の内訳を見ると、鶏肉消費量全体の約4分の3を占める国産品は、仕向け先の大半を占めている家計消費が好調なことから、増加傾向にある。3年度は、巣ごもり需要の継続などにより168万1638トン（前年度比1.9%増）と11年連続で前年度を上回り、過去最高を更新した。

主に加工・業務用に利用されている輸入品は、外食・中食需要の高まりにより、近年増加傾向にある。2年度はCOVID-19の影響により外食需要が減少したものの、3年度は空揚げなどの持ち帰り需要の増加などにより、60万4085トン（同8.4%増）と前年度をかなりの程度上回り、3年度ぶりの増加となった。

なお、合計に占める国産品の割合は73.6%と前年度から1.2ポイント減少した。

図6 鶏肉の推定出回り量の推移

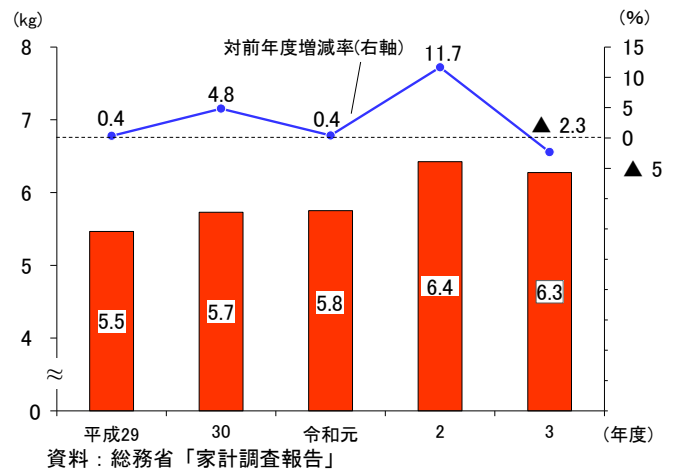


## 家計消費

鶏肉消費量の約4割を占める家計消費量は、消費者の健康志向の高まりに加え、食肉の中での価格優位性を背景に増加傾向で推移している。

令和2年2月下旬以降、COVID-19の影響による巣ごもり需要が増加する中、食肉の中でも比較的安価な鶏肉の購入数量が増加し、令和2年度に過去最高を更新した。3年度は、外出需要の回復に伴い、巣ごもり需要に落ち着きがみられたことから、年間1人当たり6.3キログラム（前年度比2.3%減）と11年ぶりに前年度を下回った（図7）。ただし、元年度までの比較では、高い水準での推移が続いている。

図7 鶏肉の家計消費量（年間1人当たり）の推移



## ◆在庫

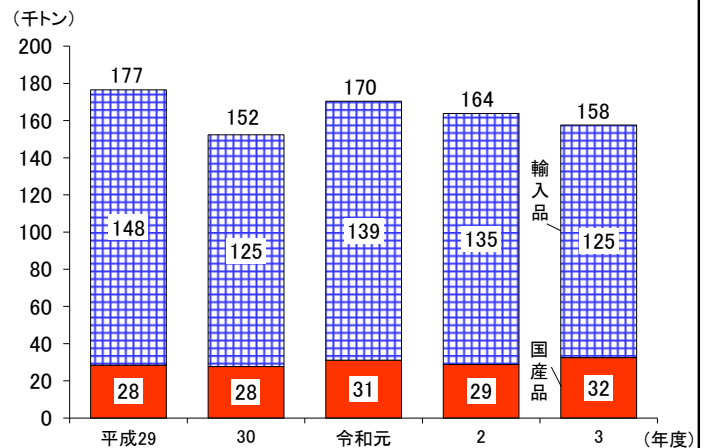
### 3年度の推定期末在庫量、前年度比3.8%減

鶏肉の推定期末在庫量は、その約8割を輸入品が占めることから、輸入量の動向に大きく左右される。

令和2年度は、COVID-19の影響による巣ごもり需要の高まりに伴う国産品の出回り量の増加や輸入量の減少を背景に、在庫は取り崩しとなった。3年度は、巣ごもり需要の継続に加えて中食需要が増加し、国産品、輸入品ともに需要が増加したことから、15万7653トン（前年度比3.8%減）と2年度連続で前年度を下回った（図8）。

このうち、輸入品は12万5160トン（同7.3%減）と前年度をかなりの程度下回った一方、国産品は3万2493トン（同12.9%増）と前年度をかなり大きく上回った。

図8 鶏肉の推定期末在庫量の推移



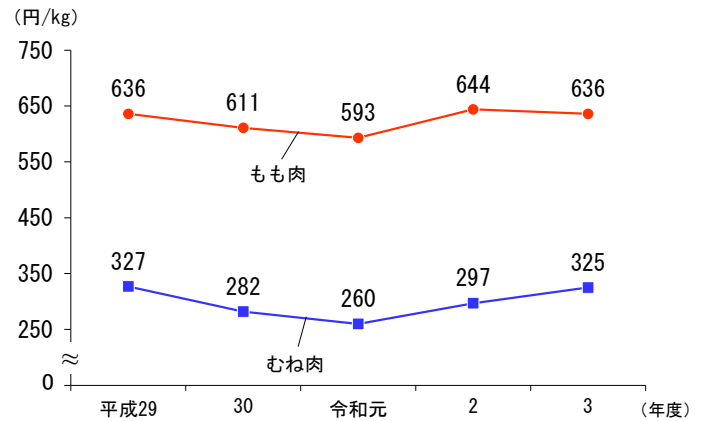
## ◆卸売価格

3年度の卸売価格、もも肉は前年度比1.2%安、むね肉は同9.4%高

国産鶏肉の卸売価格(プロイラー卸売価格・東京)は、日本では「もも肉」に対する消費者の嗜好<sup>しこう</sup>が高いことから、価格水準が「むね肉」に比べて高くなっている。「もも肉」は、主にテーブルミートに仕向けられており、「むね肉」は総菜やチキンナゲット、ソーセージなど主に加工・業務用利用が多くなっている。

「もも肉」は、令和2年2月下旬以降、COVID-19の影響による巣ごもり需要が継続しているものの、3年度は、夏以降に巣ごもり需要の落ち着きが見られたことから、卸売価格は1キログラム当たり636円(前年度比1.2%安)と前年度をわずかに下回った(図9)。一方、「むね肉」は、COVID-19の影響により外食需要は減少しているものの、加工用および量販店需要が好調であったことから、同325円(同9.4%高)と前年度をかなりの程度上回った。

図9 国産鶏肉の卸売価格(東京)の推移



資料：農林水産省「食鳥市況情報」  
注：消費税を含まない。

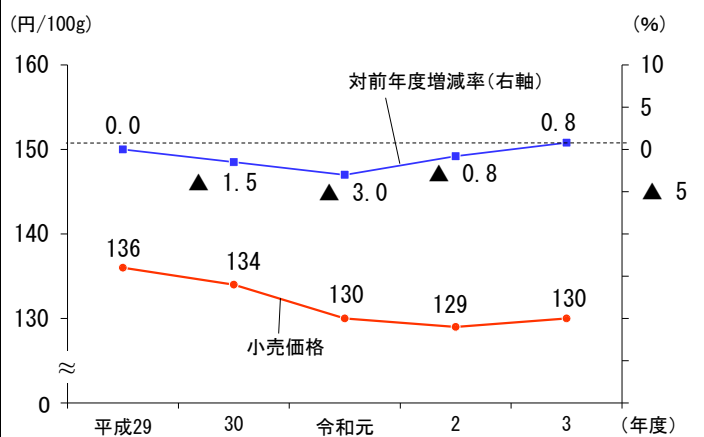
## ◆小売価格

3年度の小売価格(もも肉)、前年度比0.8%高

鶏肉の小売価格(もも肉・東京)は、近年、100グラム当たり、130円前後で推移している。

平成30年度以降、前年度を下回る推移が続いていたが、令和3年度は、同130円(前年度比0.8%高)と前年度をわずかに上回り、4年度ぶりの増加となった(図10)。

図10 鶏肉の小売価格(もも肉・東京)の推移



資料：総務省「小売物価統計調査報告」  
注：消費税を含む。